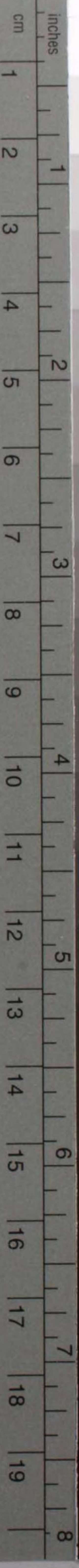


# Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

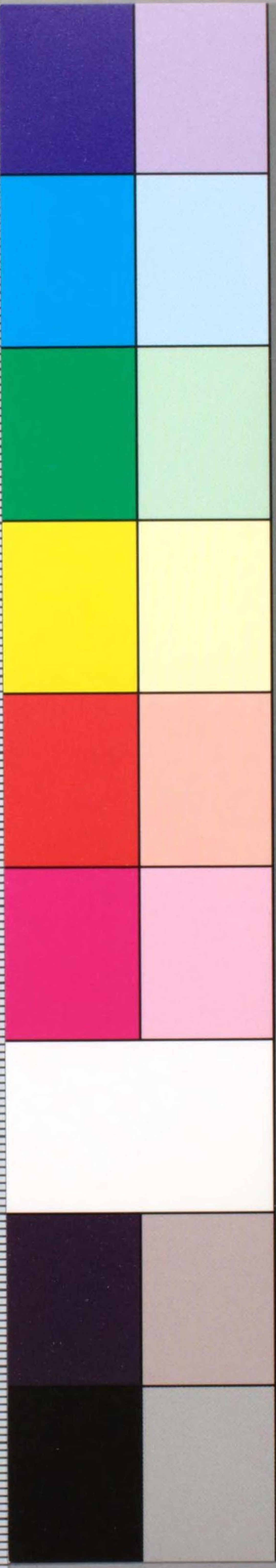
A 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



## Kodak Color Control Patches

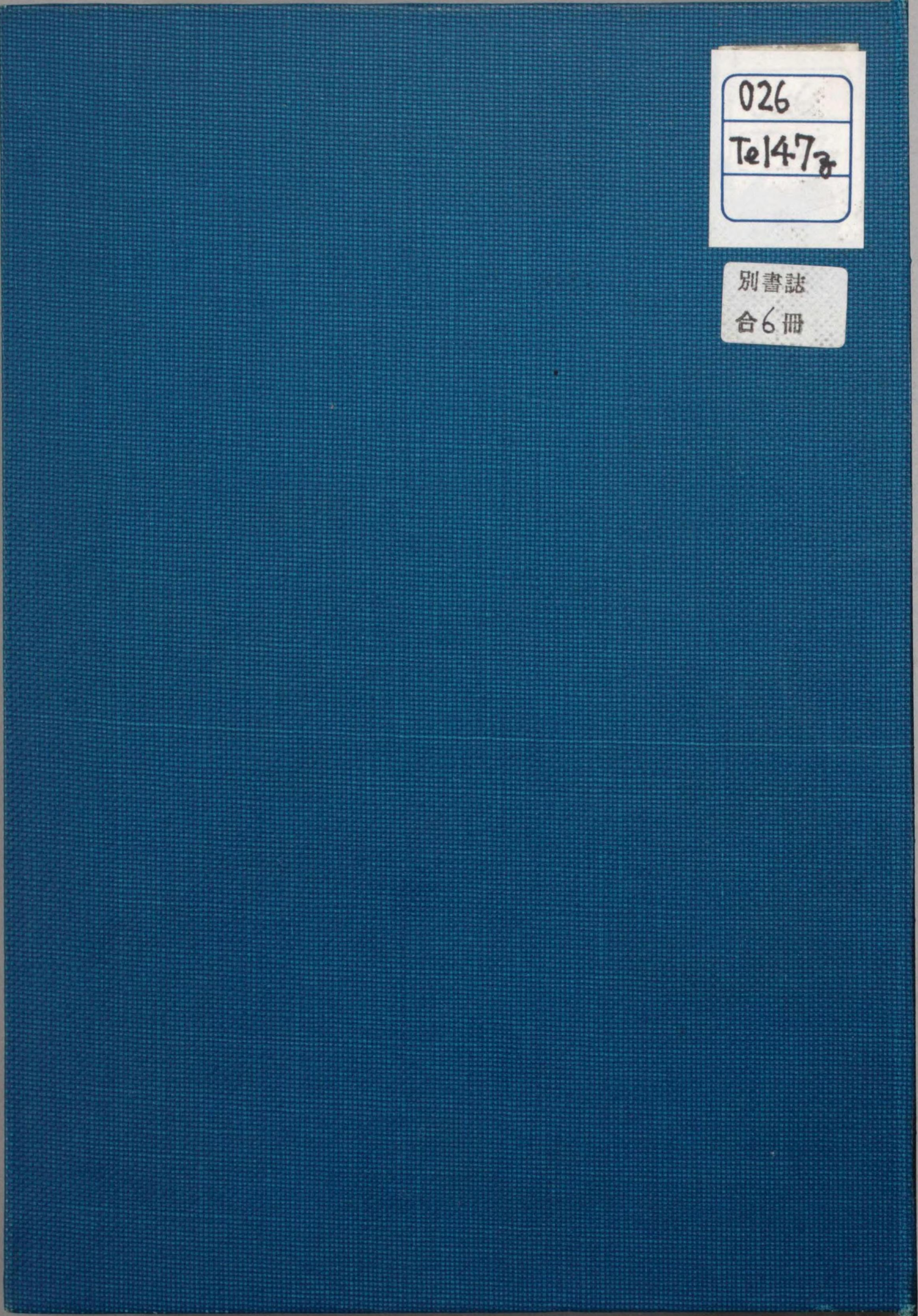
© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

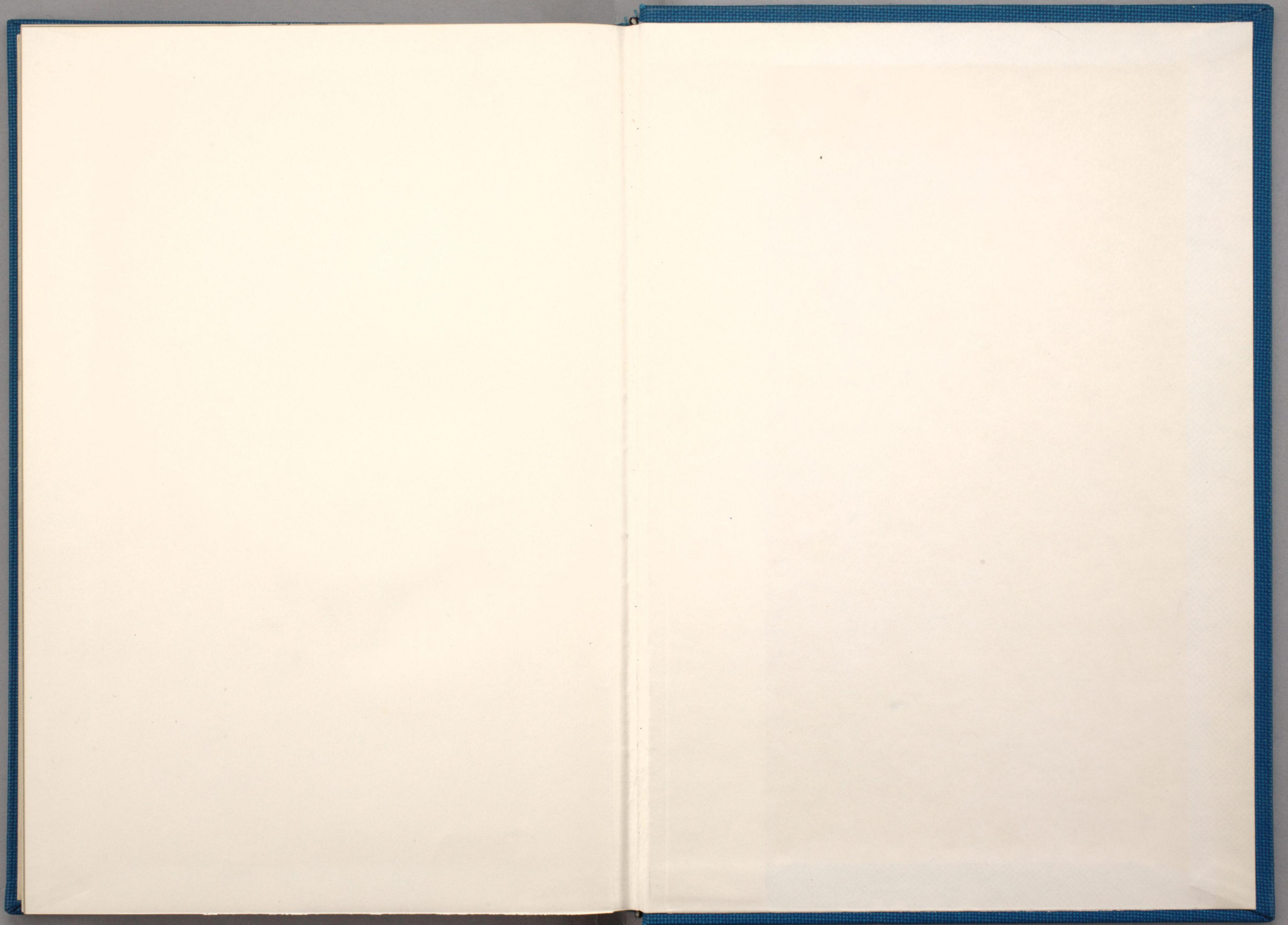


026  
Tel478

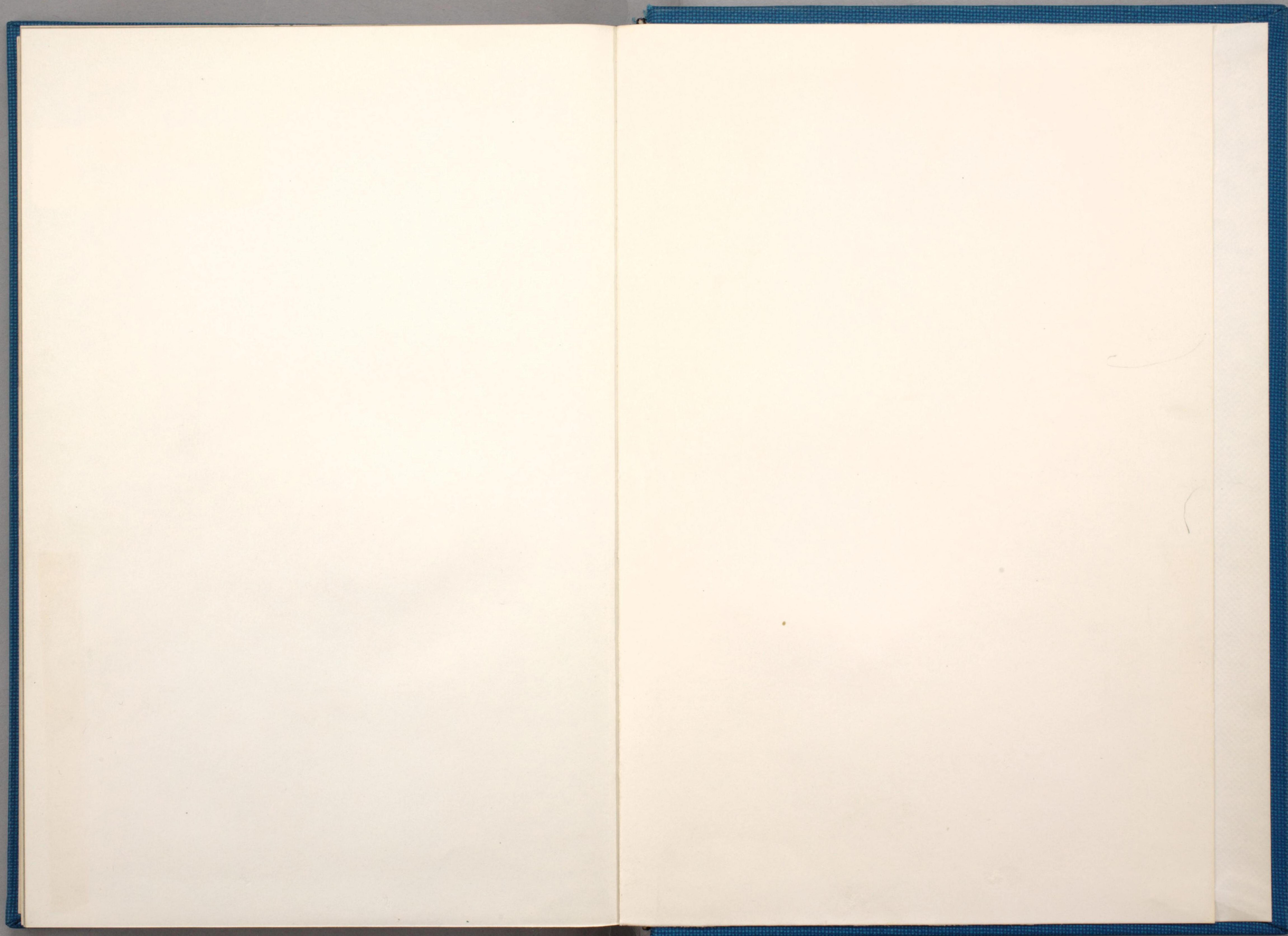
別書誌  
合6冊













斗4B52'

026-Te147z



\*00298721 \*

日本近世自筆集

善本寫真集一

天理圖書館

026

善本寫真集



026. Te 1473



これを除いた。

ある。而して連歌俳諧の類は別に期する所あり、今  
的なるものを選んで江湖博雅の一覽に供する所以で  
をなすに至った。ここにその自筆稿本類の中、代表  
學術文藝に關する書籍自ら多きを加へ、その一特徴  
天理圖書館創立以來蒐書既に二十数年、近世日本の

天理圖書館創立以來蒐書既に二十数年、近世日本の

學術文藝に關する書籍自ら多きを加へ、その一特徴

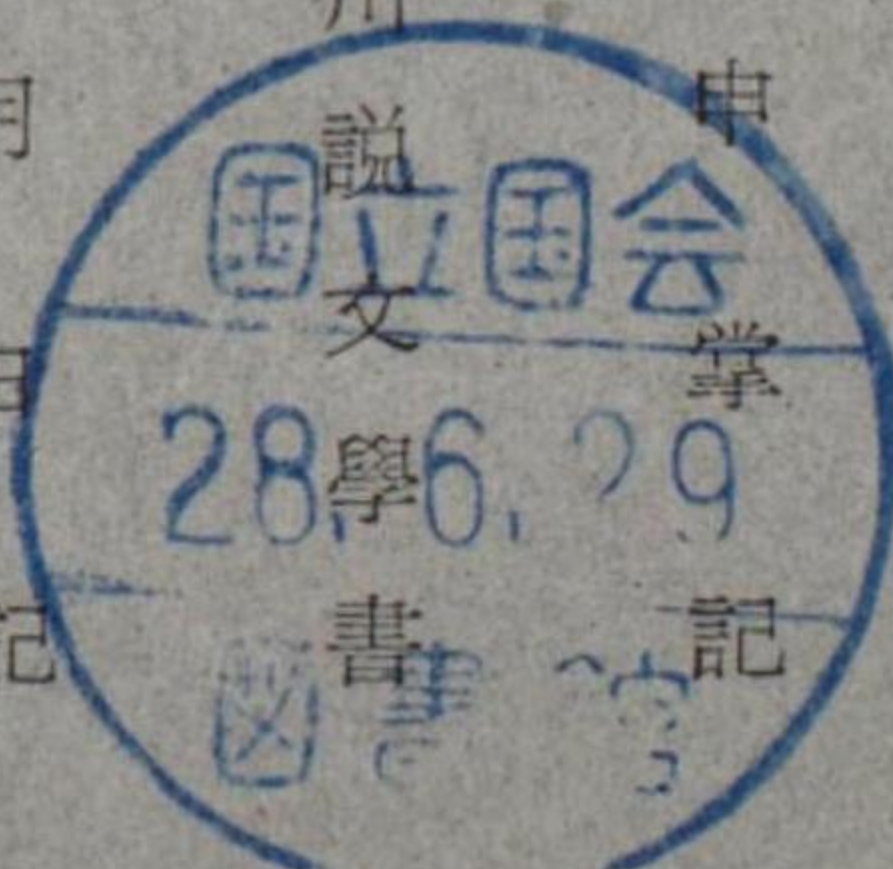
をなすに至った。ここにその自筆稿本類の中、代表

的なるものを選んで江湖博雅の一覽に供する所以で

ある。而して連歌俳諧の類は別に期する所あり、今

目次

一	大矢数成就文	井原西鶴	九	膽大小心録	上田秋成
二	源注拾遺契	沖	一〇	天地地理談	司馬江漢
三	童子問	伊藤仁齋	二	壬申	大田南畝
四	菊花堂之記	近松門左衛門	三	稻川	山梨稻川
五	讀史餘論草稿	新井白石	三	花月日記	松平定信
六	乙夜隨筆	靈元天皇	四	南總里見八犬傳 第九輯草稿	瀧澤馬琴
七	眞淵歌集	賀茂眞淵	五	萬葉集檜孺手	橋守部
八	古事記傳三之卷	本居宣長			



293721



一 大 矢 数 成 就 文



井原西鶴(寛永一九一元年祿六年)大阪の人、平山氏名は藤五。若くして俳諧に志し、  
 やがて西山宗因を師として談林俳諧の驍將となり、その縦横の鬼才を以て矢  
 数俳諧に名を得た。天和二(一六八二)年「好色一代男」を述作出版してより筆  
 を転じて浮世草子作家となり「好色一代女」「世間胸算用」「西鶴置土産」等犀  
 利深刻の筆を以て人生を活写した名作を残してゐる。図版は西鶴が延寶八(一  
 六八〇)年に尾張鳴海の俳人下里知足に宛てた手紙を軸に仕立てたもの。

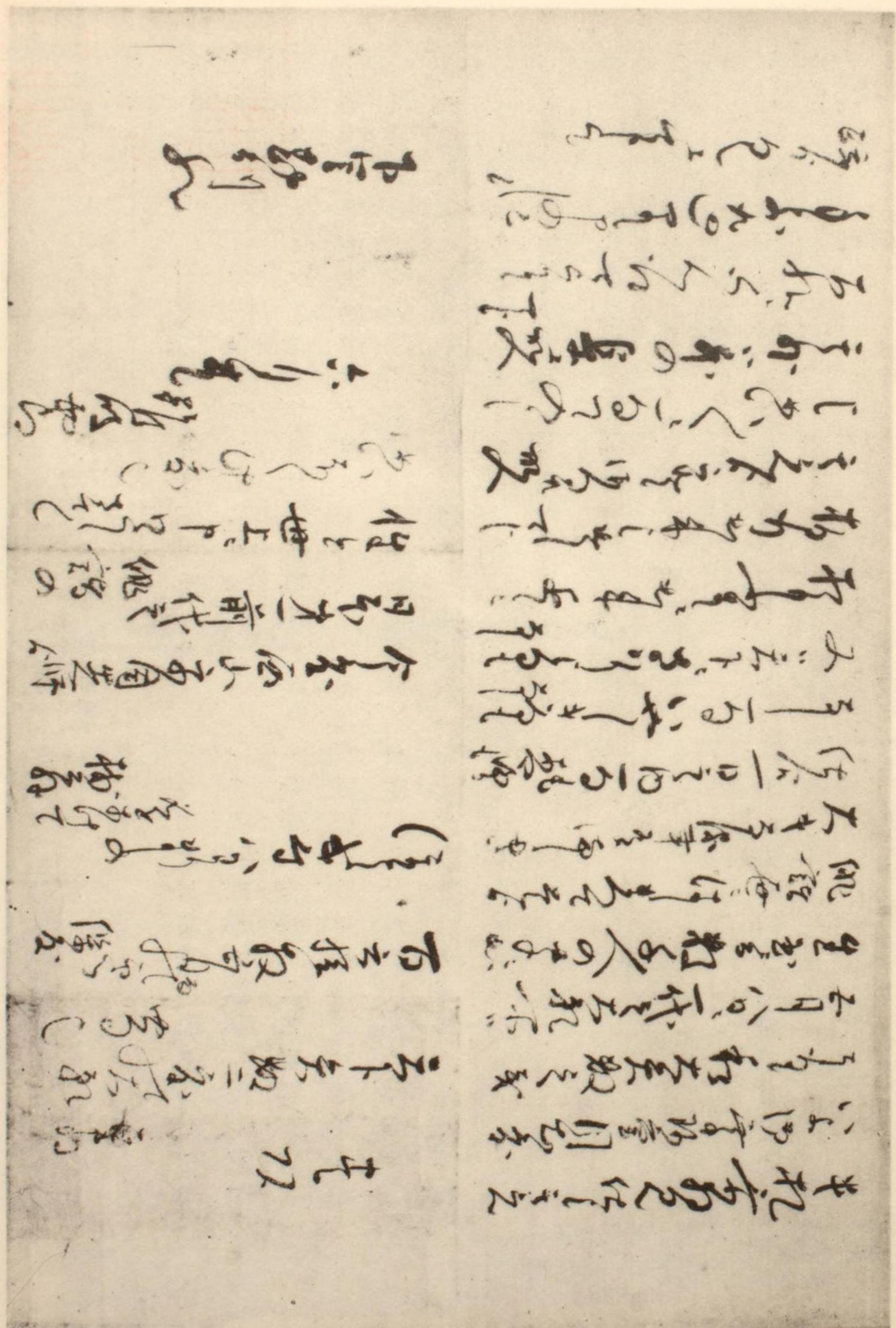
巻 頭

西 鶴

貴札忝拜見仕申候其元  
 いよ御無事珍重目出度  
 奉存候私大矢数之養  
 五月八日二代之大願所ハ  
 生玉ニ而数千人の聞ニ出  
 俳諧世ニはしまつて是カ  
 大きなる事有ましき  
 仕合一日之内一句もあやまりも  
 なし一句いやしき句もなし  
 又ハ天下ニさハリ申候句もなし  
 おもひのままニ出来近々ニ  
 板行出来申候遣し可申候  
 其元カ被遣候御句共加入  
 申候めいニ一句つゝ入申候  
 其外ハ外の集ニ加入可申候  
 左様ニ御心得可被下候  
 手前取込早々申のこし候  
 跡カ具ニ可申上候

天下矢数二度の大願 四句也  
 百六拾枚五月雨の雲 保 友  
 ほととぎす八わりましの 梅 翁  
 名をあけて  
 今度西山宗因先師カ  
 日本第一前代之俳諧の  
 性と世上ニ申わたし候  
 さてさて  
 めいほく此度也  
 難波西鶴

六月廿日  
 下里勘州様





二源注拾遺

契沖(寛永一七一—元祿一四年一六四〇—一七〇一) 俗姓下川氏。七歳にして出家し高野山にあつて仏学を修め、後大阪妙法寺に住し貞享三(二六八六)年頃圓珠菴に隠棲した。國学の先驅として、古典に対する文献学的研究、科学的方法による國語研究の輝しい業績は、その代表的著作たる「萬葉代匠記」「和字正濫鈔」等にうかがふことができる。本書は古註を訂す目的で書かれた源氏物語の註釈書。袋綴八冊。縦二三・五糎、横一七糎。第一冊は大意として総論をのべ、以下七冊は各巻につきその古註を抄し、今案として自説をのべる。以奥書に 右源語拾遺七卷一覽湖月抄之次率尔

註愚意以備他日校考者也 後加大意一卷 共八卷全

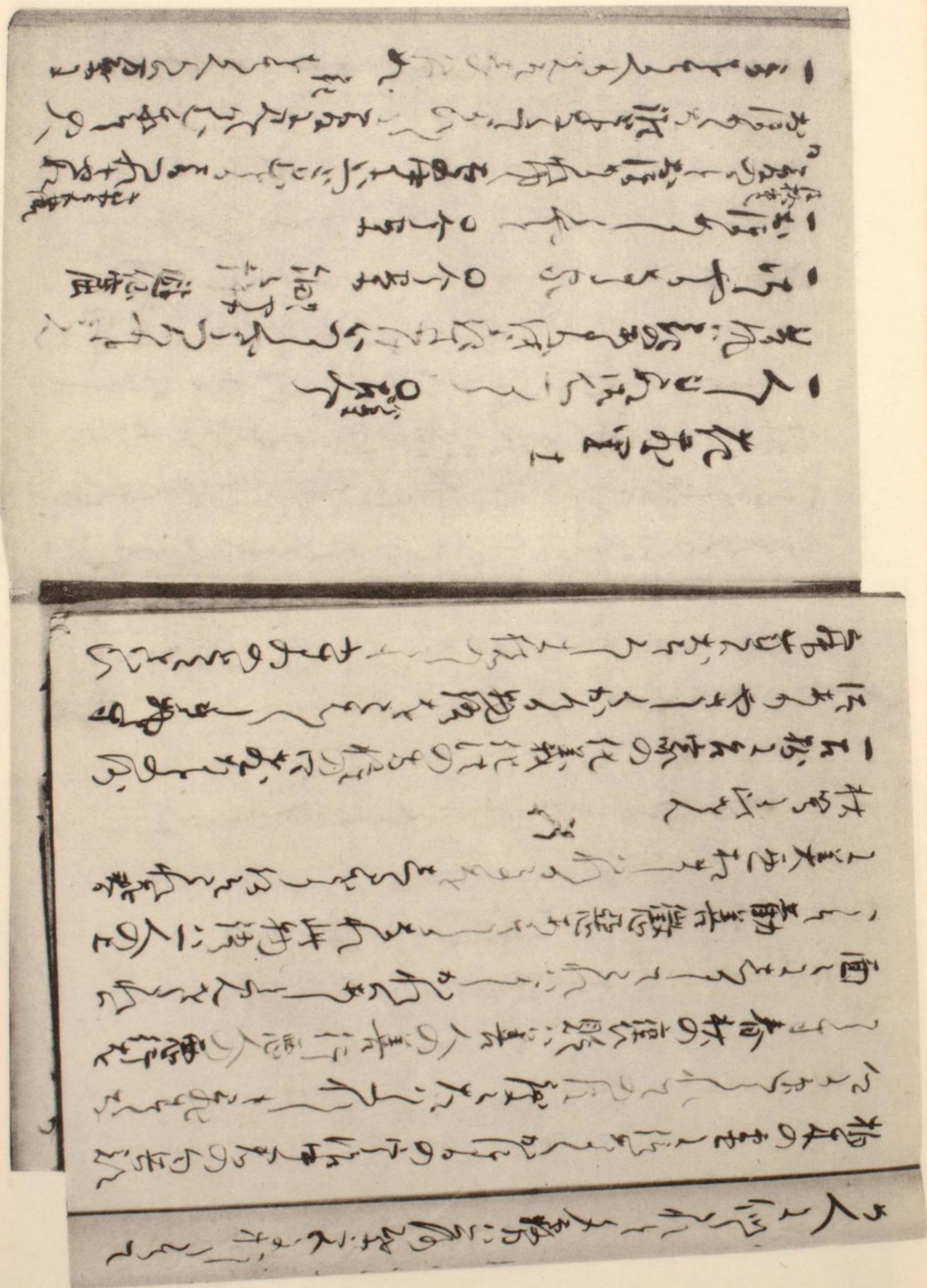
元祿九年七月十九日

密乘沙門

契沖

同十一年正月五日一校早

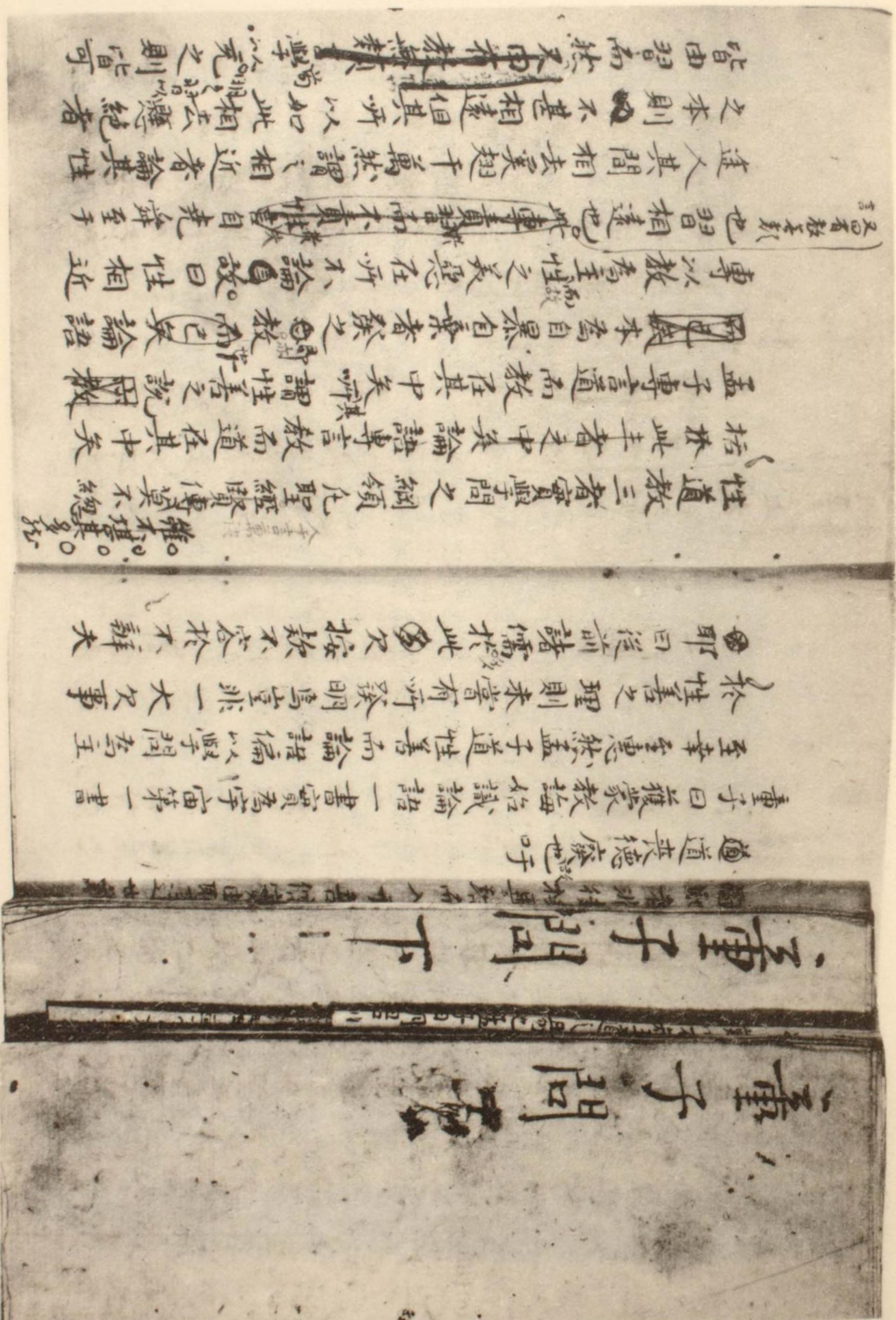
と。卷五は別筆。安藤年山の旧蔵、後立原翠軒表紙を附して題簽を記したものと云ふ。





三童子問

伊藤仁齋(寛永四—寶永二年一六二七—一七〇五)名は維楨、字は源佐、京都の儒家。朱子学をうたがって、歴史的視角と解釈学的新方法により、原始儒教を探究、もつて孔孟の血脈をさぐると称した。よつて世これを古義学とよぶ。元祿の日本を反映した自由な科学性と、活動的な楽天的な主張は当代学界の大半を風靡したのみならず、日本の近代的学問の曙光となった。童子問三巻は、仁齋学なり想熟した晩年の古義学の方法と結果とを、平明に述べたもので、明晰にして、熱意のこもつた文章と共に、近世日本に於ける最高の名著である。この書は元祿六年大略整ひ、歿後寶永四(一七〇七)年、一子東涯の手により出刊を見たが、ここに掲げる自筆本は、元祿四年の稿本。袋綴三冊。縦二五糎、横一七・五糎。



童子曰獲蒙教誨始識論語一書實為宇宙第一書  
至幸至惠然孟子道性善而論語偏以性善為五  
於性善之理則未嘗有所發明焉豈非一大欠事  
耶曰從前諸儒於此多欠按款不容於不詳夫

性道教三者實學問之綱領凡聖經賢傳莫不總  
括於此二者之中矣論語專言教而道在其中矣  
孟子專言道而教在其中矣所謂性善之說固教  
固也本為自暴自棄者發之教而已矣論語  
專以教為主性之美惡在所不論故曰性相近  
也習相遠也此專言教而不專性教自先舜至子  
述入其間相去奚翅千萬然謂之相近者論其性  
之本則不甚相遠但其所以如此相去懸絕者  
皆由習而然不即有教無類之字以充之則皆可



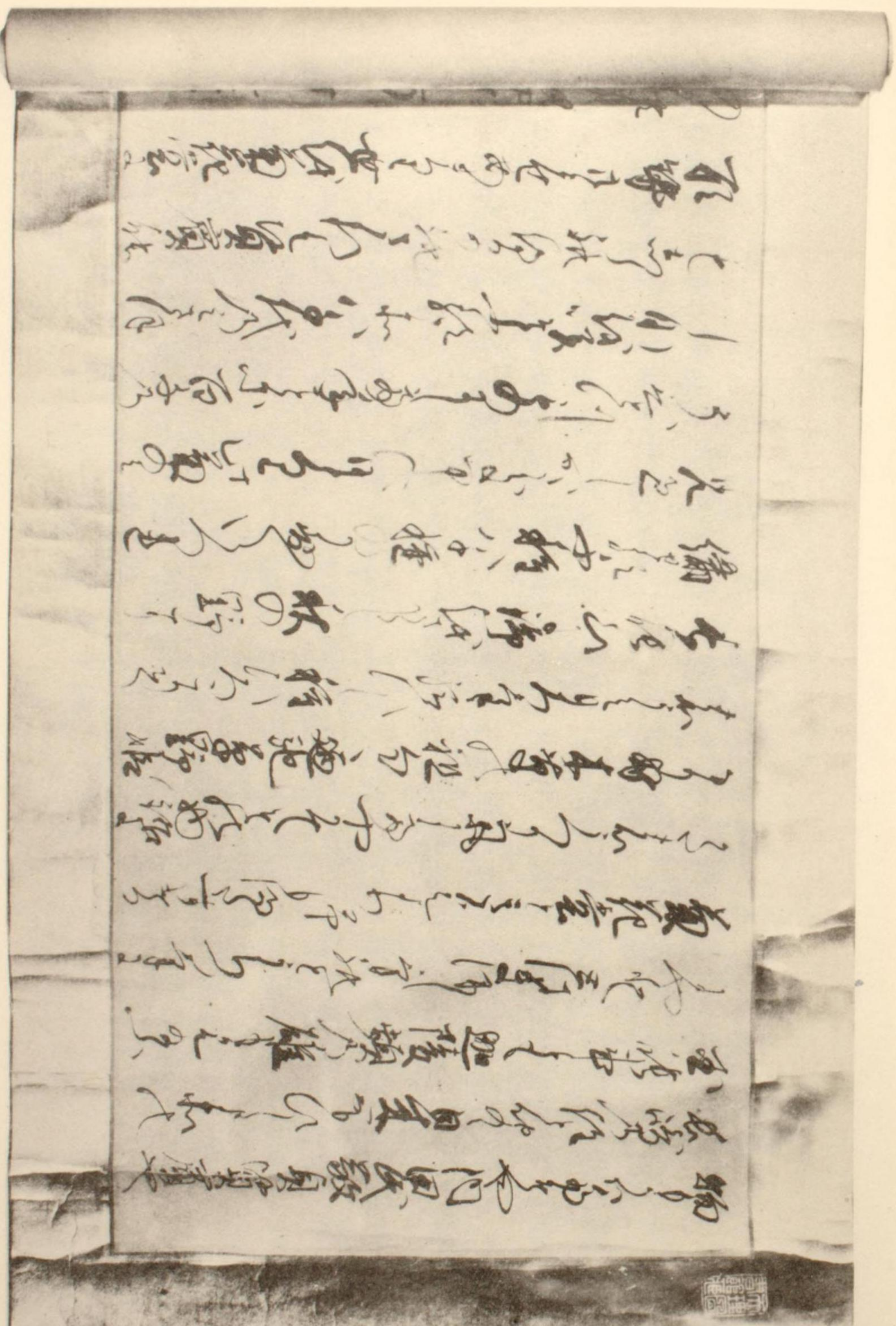
四 菊花堂之記

近松門左衛門(承應三—享保九年)杉森氏、名は信盛、巢林子、平安堂、具足居士等の別号あり。近世劇文学の第一人者で、「作者の氏神」と称せられ、その坂田藤十郎のために書いた歌舞伎脚本、宇治加賀掾、竹本義太夫のために書いた浄瑠璃は日本文学の代表的作品として普く人の知る所である。本書は友人内田敬貞が菊花堂と名付ける小亭を営んだ際に贈った一文で、菊花の名に因んでその花の徳を讃へ祝意を表したものの。奥に

寶永己丑のとし孟多十七夜

近松 平安子具足居士 信盛(花押)

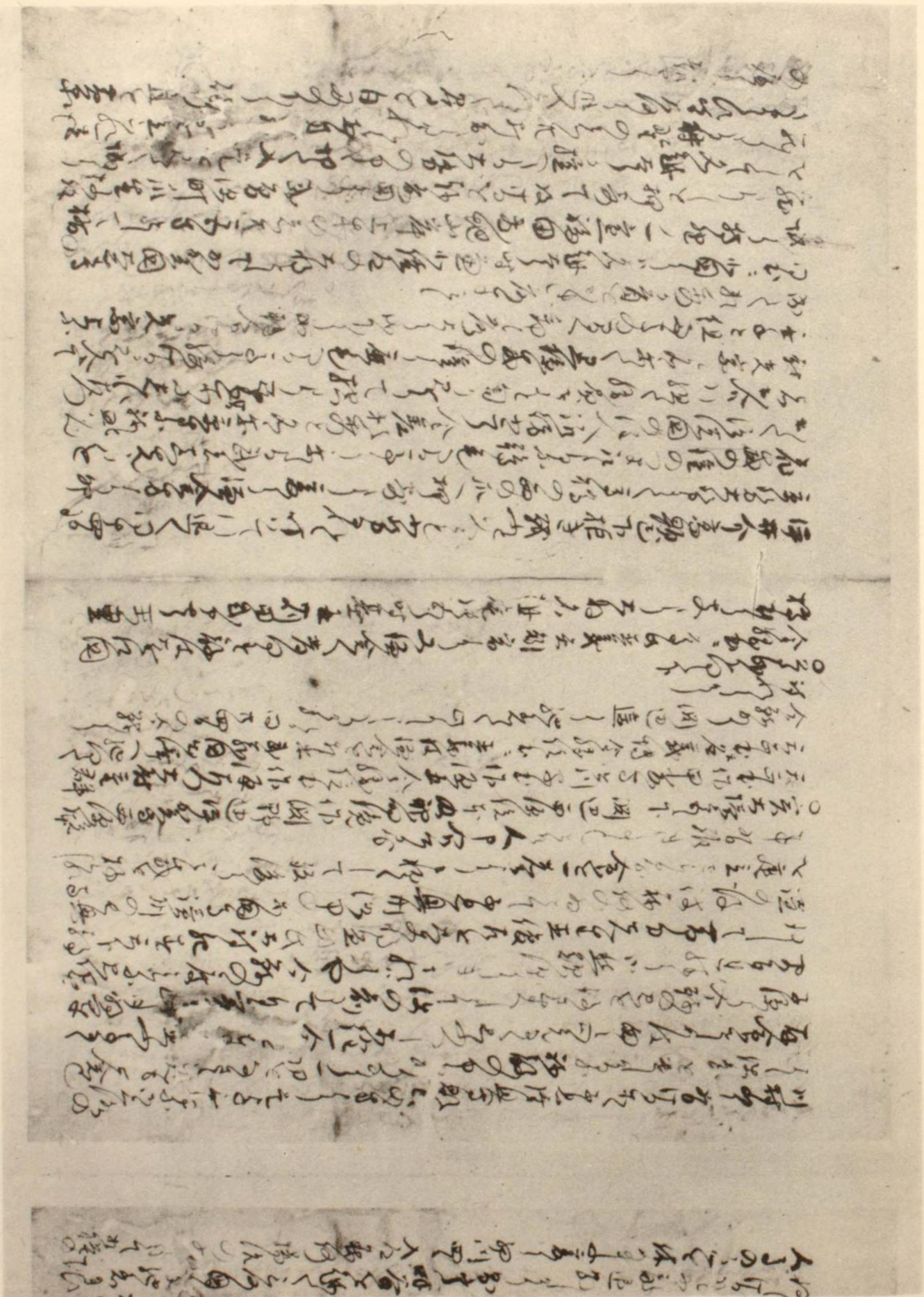
とある。己丑のとしは寶永六(一七〇九)年。





五 讀史餘論草稿

新井白石(明曆三—享保一〇年  
一六五七—一七二五)名は君美、字在中、儒者として若き將軍家宣に仕へ、後幕政に参じて、大いに経綸する所があつたが、吉宗將軍となるや職をやめて著述に専念、著す所三百、学百科にわたり、各その博覧と識見とをもつて後世学徒必讀の書と称せられる。讀史餘論三卷は正徳二年、家宣の為に講じた日本政治史の草稿で、天下の大勢九変して武家の代となり、武家の代五変して徳川時代に至るとする史観と、資料の利用と記述の科学性は、今日に於ても高い評価を持つ。ここに掲げる草稿は、卷の二、後醍醐帝中興御政務ノコト」の部分十一枚、一帖。縦二七・五糎、横三三糎。原物は、縦二四・五糎、横一五糎である。





六乙 夜 隨 筆

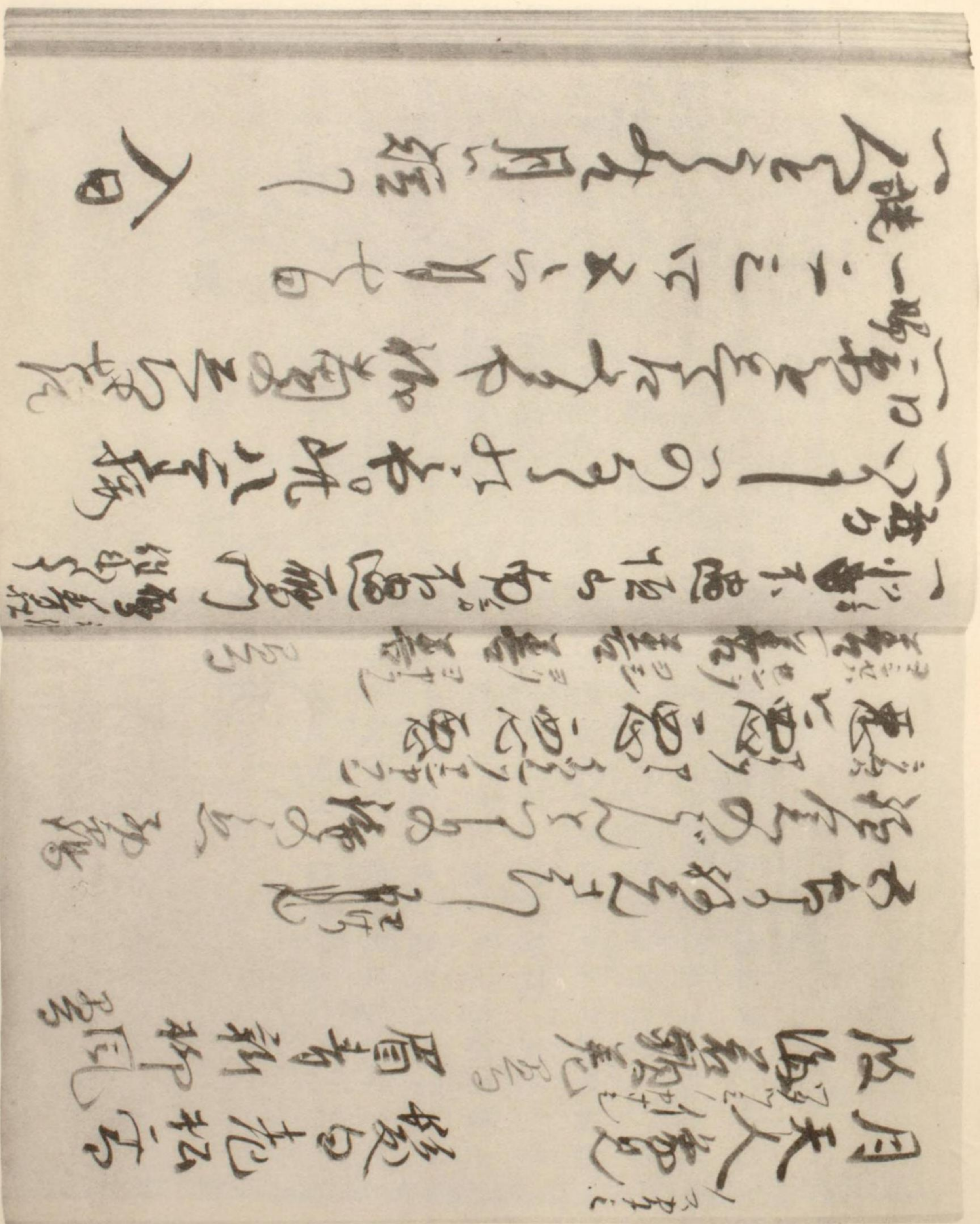
靈元天皇(承應三|享保一七年  
一六五四|一七三二)は第一一二代の天皇として寛文三(一六六三)年即位、爾後二四年間在位された。特に歌道に秀でさせられ、古今傳受を受けられて當代の堂上歌壇の中心であらせられる。本書は袋綴、八七枚(墨附八五枚)の冊子。縦一九・五糎、横一三・五糎。表紙左肩の外題も共に宸筆である。内容は折々の御見聞を書留められたもので、元祿一五、六(一七〇二、三)年頃の御筆すさびと推定される。和漢の学・詩歌・管絃・絵事・天文等万般に亘り、或は古書を拔萃し、或は近侍の雑談を記せらるる等天皇の御学識と御趣味をふかがふに足るものである。

五郎か寝覚さひしかりけり

鎌倉のごんとはかりの鐘のこゑ

西 鶴

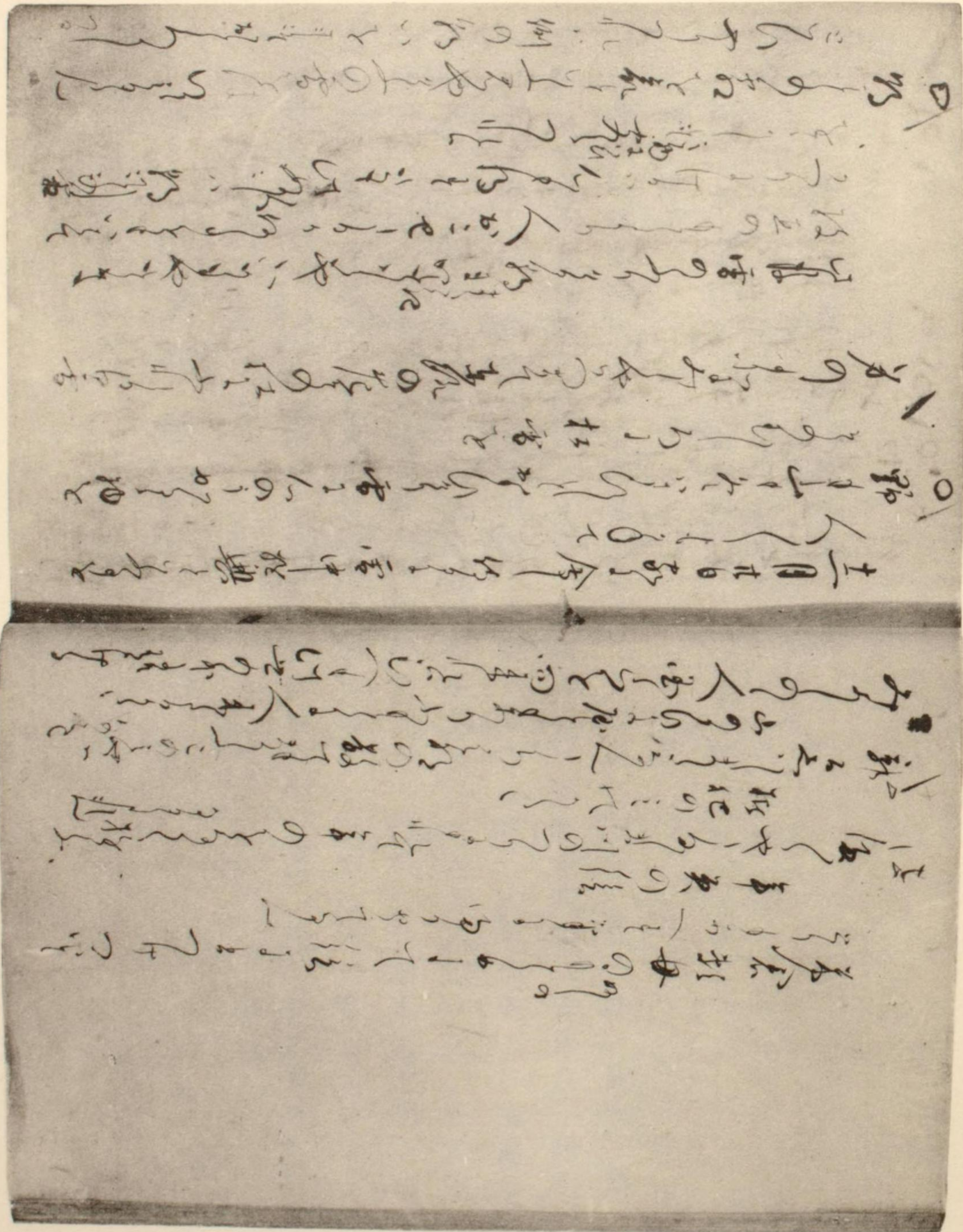
と西鶴の句を抄記されたるなど、攝陽市井の一俳人の句にまで、御關心を寄せられたことの拝されて特に興味が深い。





七眞淵歌集

賀茂眞淵(元祿一〇—明和六年  
一六九七—一七六九)岡部氏、名政躬、通称衛士、縣居と号した。遠江の人、田安家に仕へた國學者たるは云ふをまたぬが、國學は眞の意味に於て、眞淵に於て体をなした。日本古代精神を正しい古典の解釈によつて把握せんとし、古典の理解研究の爲には古文辭の使用によつてその語に熟する方法をとつた為、作歌作文をも重んじた。その萬葉調和歌は、長く二條歌風の下にあつた和歌を自由の域に開放したものである。ここに見る眞淵歌集二冊は、縦二四・五纏、横一六・五纏。元文六即ち寛保元(一七四一)年より延享五即ち寛延元(一七四八)年に至る間の詠、祝詞、紀行文をも若干ふくむ。歌風は、若き頃の古今新古今調より萬葉調にうつる過渡期で、その変化を示して興味多し。



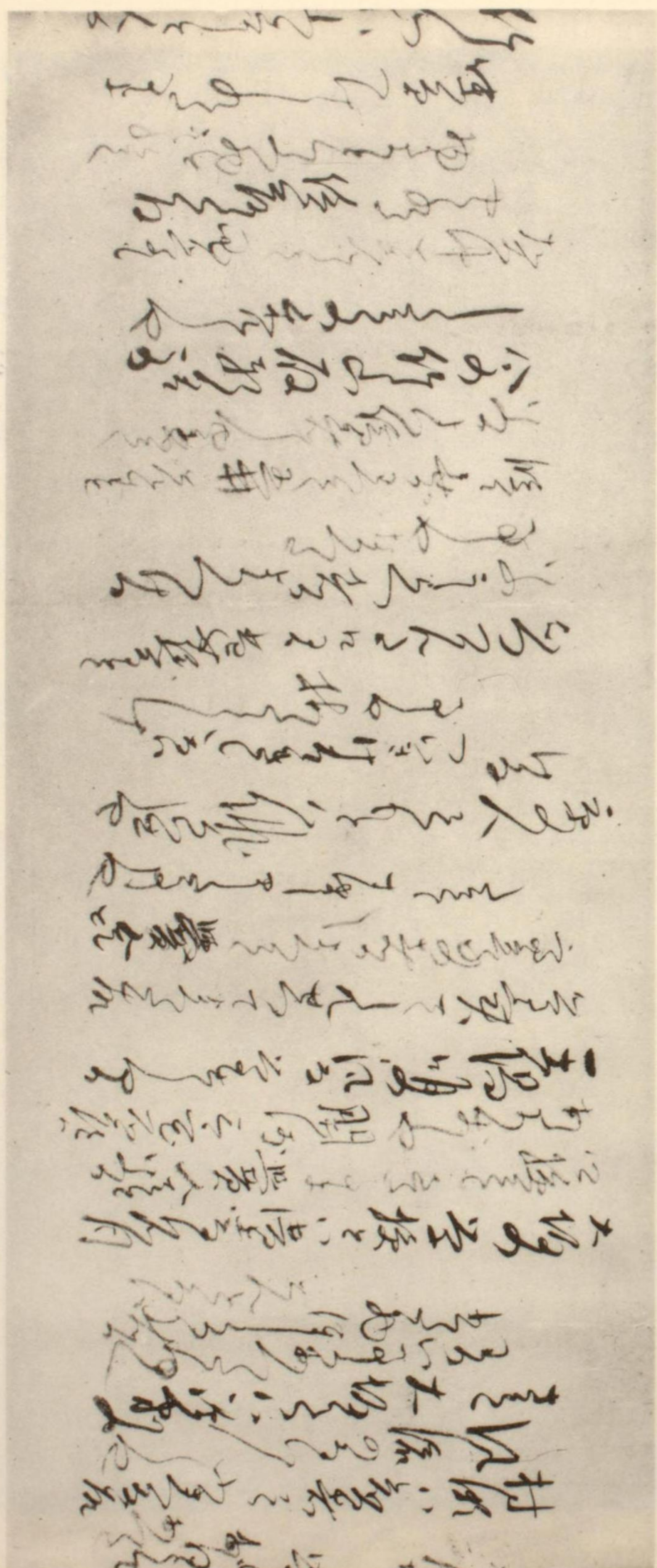






九 膽 大 小 心 録

上田秋成(享保一九—文化六年)通称東作、号餘齋、俳号無腸、大阪に生れ、京都に歿す。医を業とした國学者。また煎茶道、俳諧等諸藝に出入し、雨月物語、春雨物語の二小説の作をもつて著名。膽大小心録三卷は晩年の隨筆で、中には歿した文化六年になる部分もある。多藝多能であり、且つ愛すべくも我執強く、偏奇な性癖の持主であった秋成一流の、歴史上、また當代の人物に關する忌憚なき批評評論、文学茶道に關する隨想を中心に、万般にわたる感想を録する。その文体は応々口語をまじへ、彼の口吻をさながらに伝へる。この書は轉写本によつて世に行はれるが、ここに示す自筆本は、三分の一程を残すのみながら、流布本の誤を正す所多く、幼時疱瘡で三指を欠く手で書かれた筆蹟は、即ちその性格をも示す。卷子本四卷。二四編。

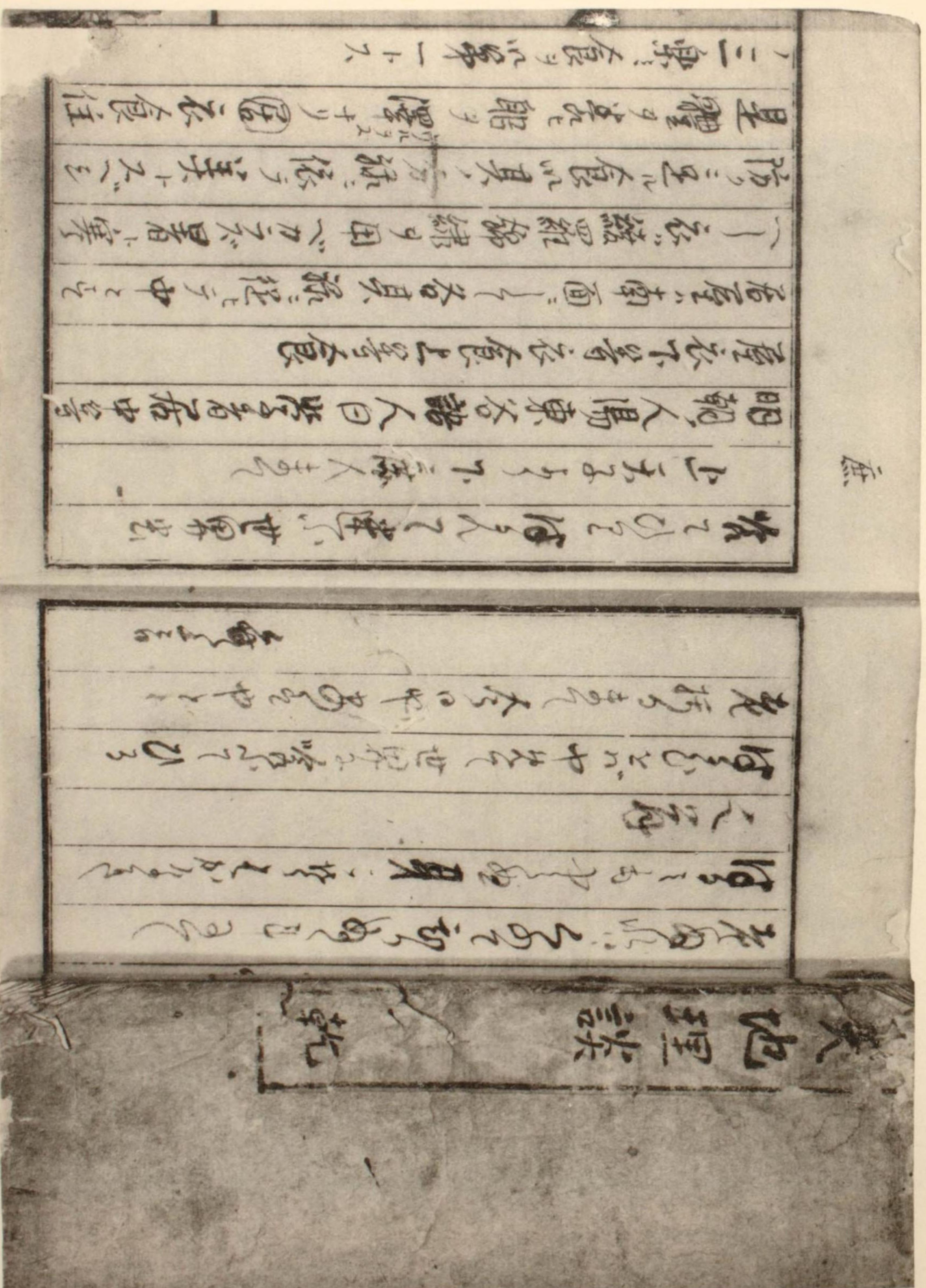




10 天 地 理 談

司馬江漢(元文三—文政元年) 本姓安藤氏、後、生田氏に入る。名は峻、字は君嶽、通称勝三郎。広く西洋文化を導入し、天文地学では夙に地動説を唱へ、洋画銅版画の先達であつた。地理談、袋綴二冊。縦二三纏、横一六纏。内題に無言道人筆記とある。文化一一(一八一四)年七七歳の頃、極晩年の記と考証される。この書はイソポ物語の影響もあつて、処世の寓話教訓に富み、中に、彼の抱懐した、東洋的な逸民思想と、西洋風な実証主義窮理思想との混合の上に立つ虚無思想があらはれている。これは近世には特有な思想であつて、ここに見える、

喰てひりつるんて迷ふ世界虫上天子より下庶人まで  
の一狂詠がよく、彼の傾向を示すと云ふべきである。





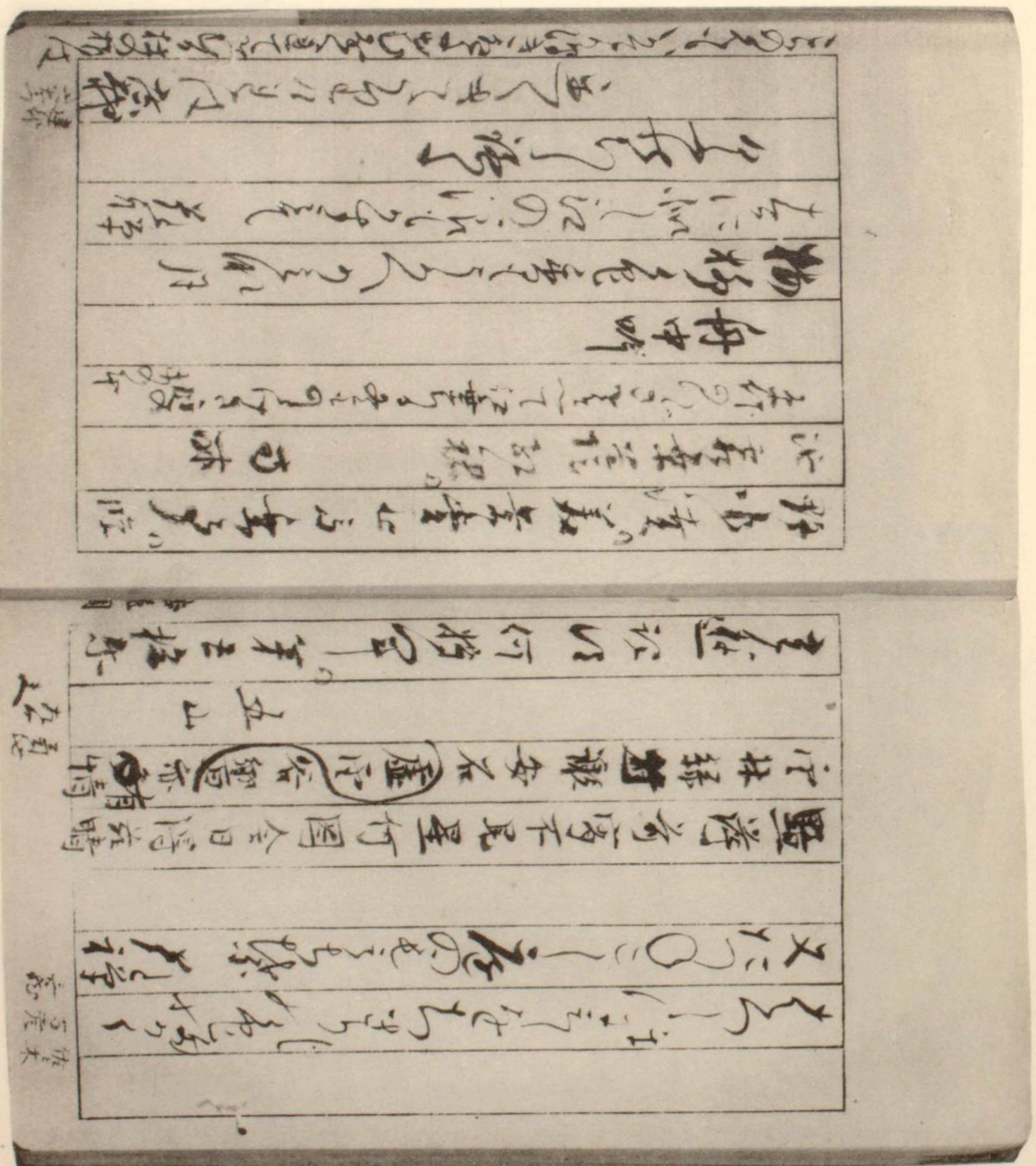
二 壬 申 掌 記

大田南畝(寛延二—文政六年)名は覃、字は子耜、通称直次郎、蜀山人の号を以てきこえる。幕臣。近世後期文化人の代表で、学博く、識高く、実際の能良吏たるにたへ、藝術の才は、雅俗に通じ、狂詩狂歌戯作にわたり、江戸文壇の中心人物であつた。その文化九(一八二二)年六四歳一年間の手帖とも云ふべき壬申掌記は、彼の諸方面への關心と、広い交友と、大江戸にこの人物の経験したゆたかな趣味生活を記録している。丁度ひらかれた場面は、十月廿四日仁正寺侯山莊に於ける諸家の詠をとどめる。南畝のは、

重遊記得何將軍。第五橋東野水濱。

美景賞心多樂事。臨池霜葉蔭紅裙。

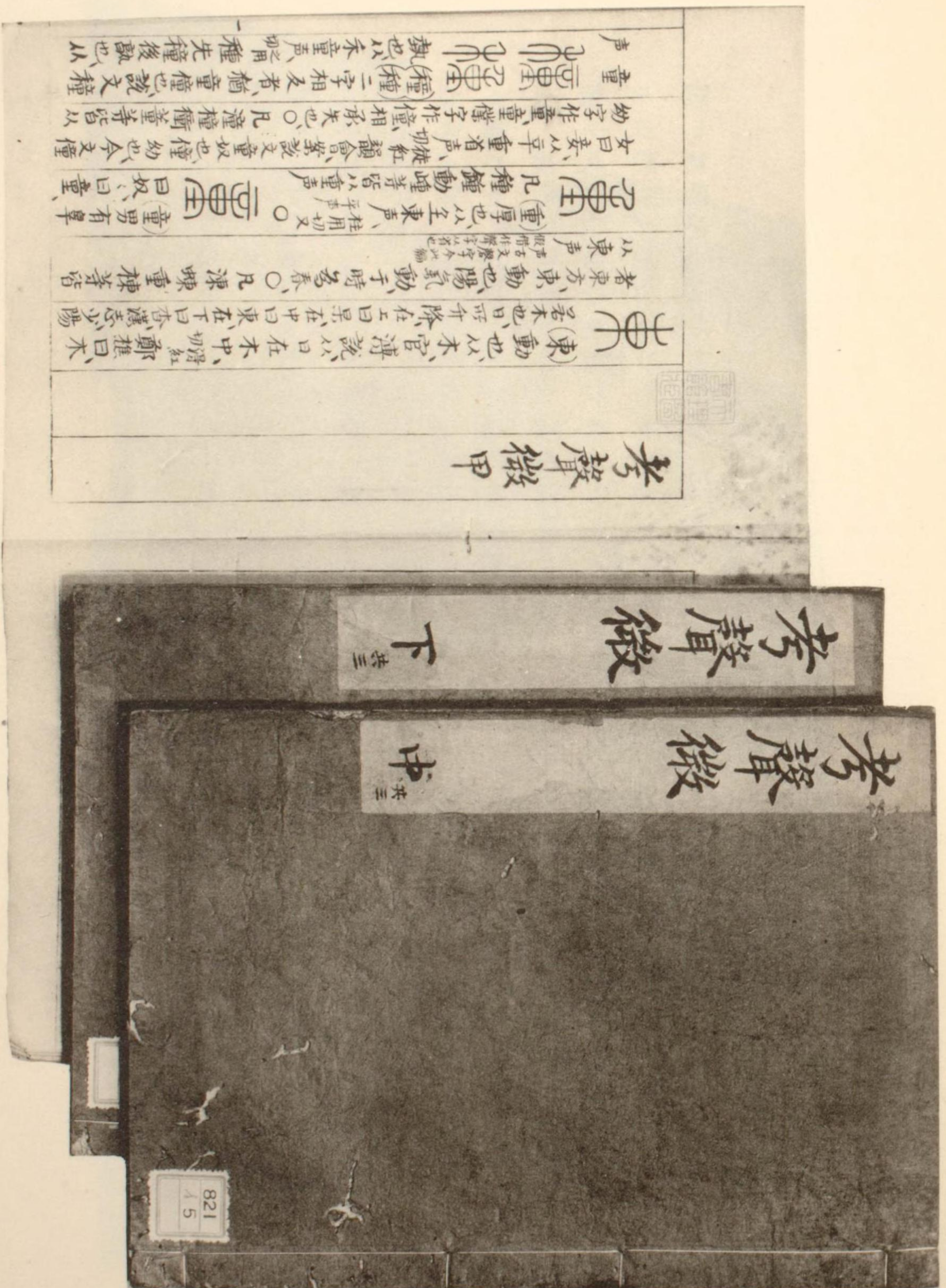
糸竹のひびきをそへて紅葉ちる冬ものどけき庭の木の本とある。袋綴二冊。縦二〇糎、横一三糎。





三 稻川 説 文 學 書

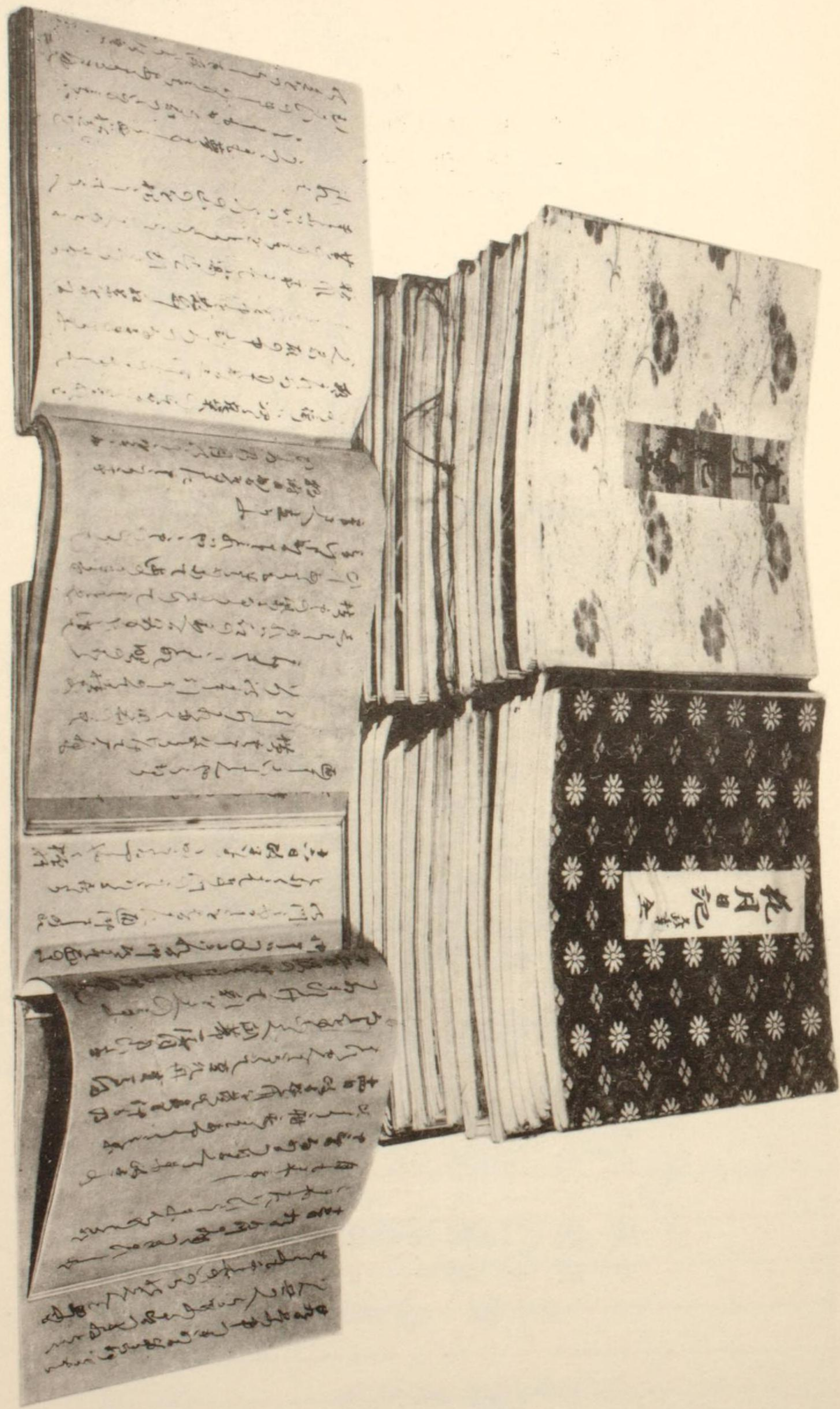
山梨稻川(明和八—文政九年 一七七二—一八二六)名は治憲、字は玄度、駿河の儒。古文辞学の流に属し、詩書をよくし、最も説文学に造詣があり、音韻学の研究より入って、字形文意にかへり、経学に及ぼうとした。本館蔵する自筆の説文学書は、詩経より韻をふむ字を抜出分類した古音譜一冊、この試みを広く中国古典に用ひた古聲譜一冊。その文字を音を表はす旁によつて分類配列した諧聲圖二冊は文政六(一八二三)年の叙。その改稿二冊。古音を表にして、後世の謬を正し、あるべき所に配した古音律呂三類二冊。斬新にして正確なる方法を以て、古音を考究、新見に満ちた考聲微三冊。ここに示す所がこれである。以上の研究に基き説文を再編成せんとした文緯二十巻の略本、文緯略八冊は文政五(一八二二)年の叙。とその改稿八冊。文緯と同内容を別法で配列せんとした文緯別本四冊。皆袋綴大本にしてもつて稻川説文学の全貌を知ることが出来る。





三花月日記

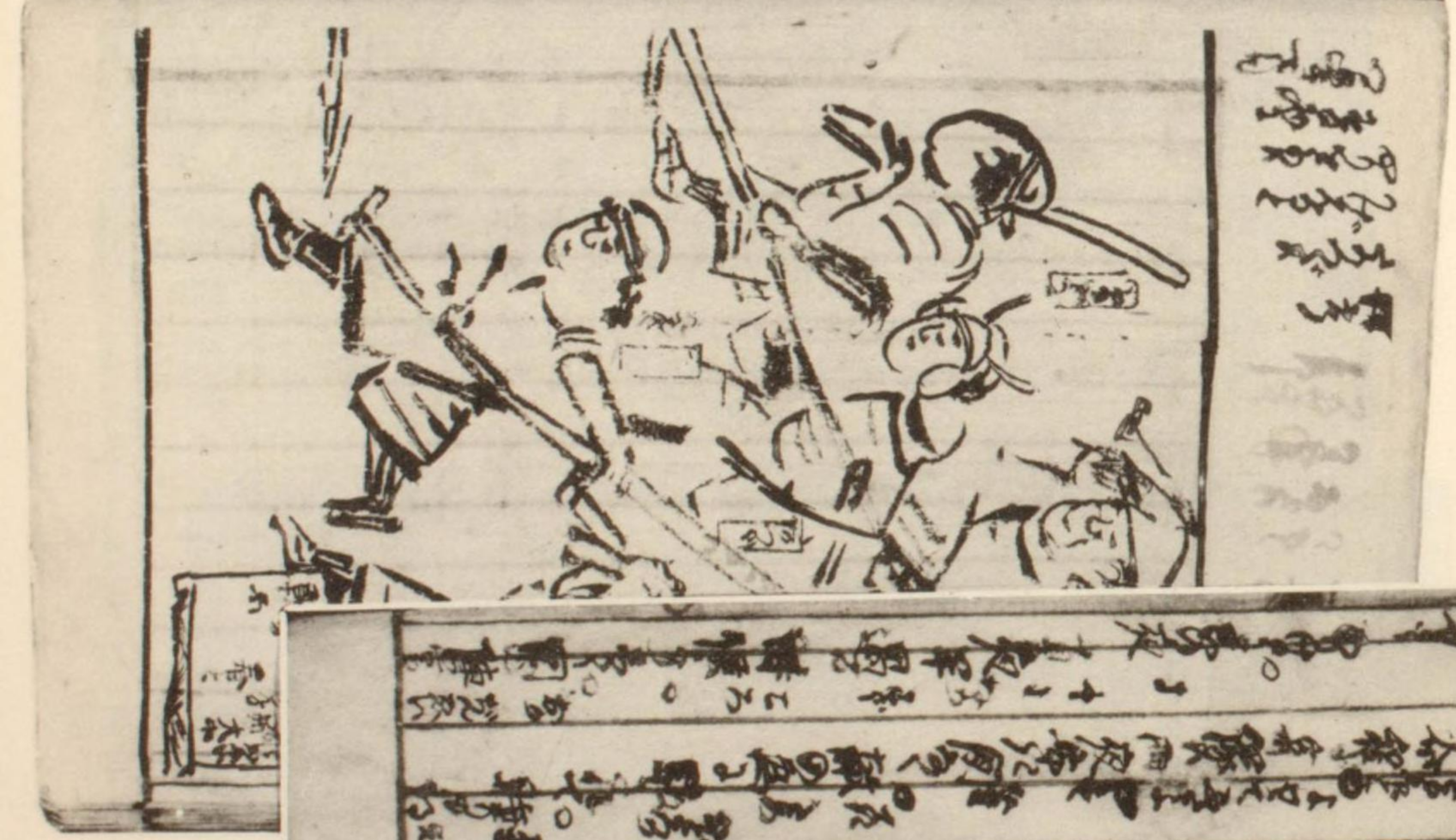
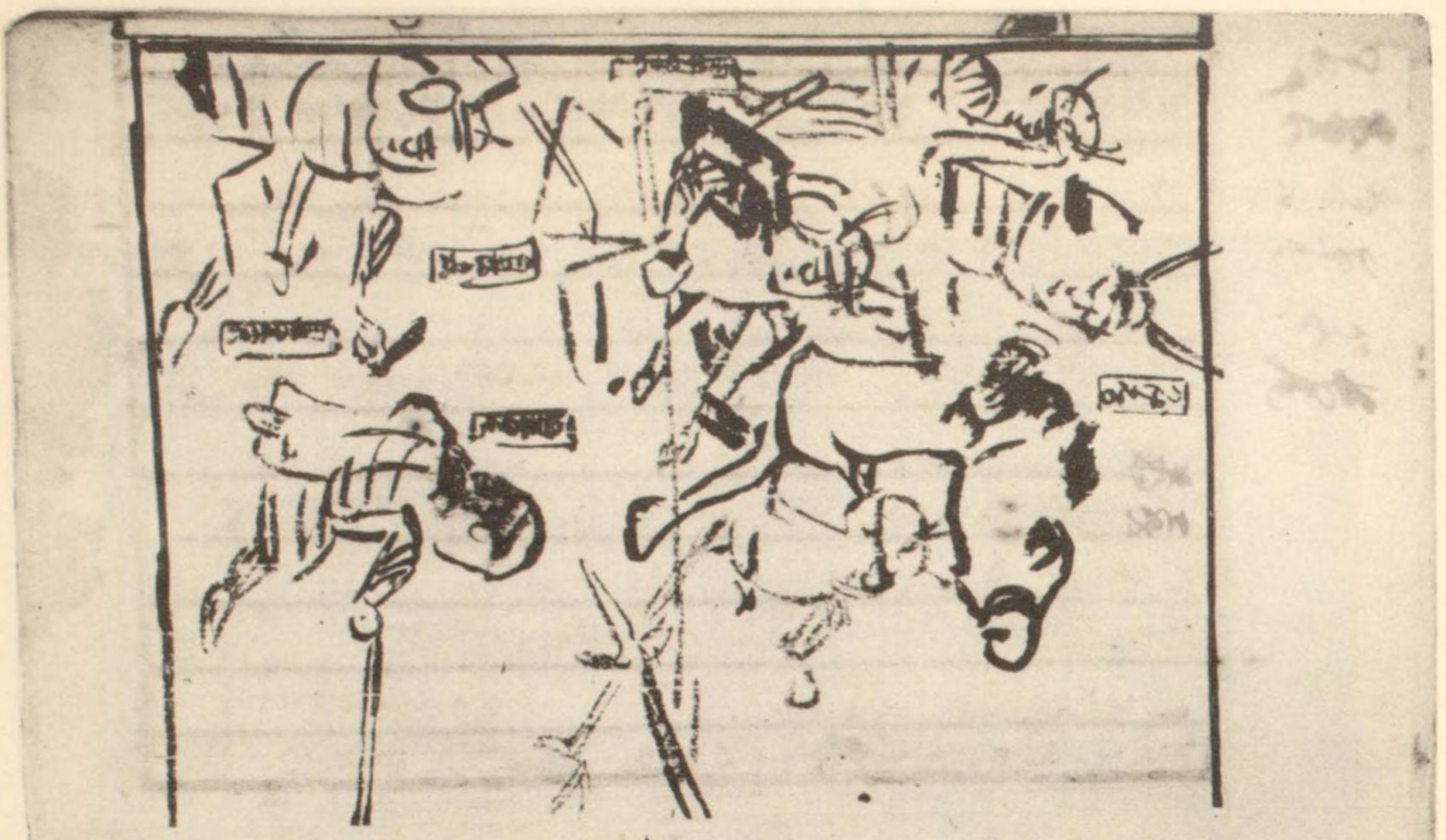
松平定信(寶曆八—文政二二年  
一七五八—一八二九)は田安宗武の男。徳川吉宗の孫に当る。樂翁と号し守國公と諡す。奥州白河藩主。天明七(一七八七)年三〇歳にして老中首座となり、寛政五(一七九三)年辞する迄幕政を掌り、所謂寛政の治を布いた近世の名相。かねて和漢の学に通じ文藻に富み、趣味亦豊かに特に國文和歌に秀でた。本館、定信の遺稿を多く蔵する。その一つがこの花月日記である。綴葉装色替り古代錦布表紙。三四冊、序一冊。用紙色替り胡粉紙。縦横一八纏。侯の退隱の年文化九(一八一二)年より文政一(一八二八)年除夜に至る日記で、紀事全く俗事に關せず、四時の風物花鳥風月を流麗の雅文にて記し和歌を交へたるもの。堅田侯堀田正敦自筆の序一冊を副ふ。





四 南總里見八犬傳第九輯草稿

瀧澤馬琴(明和四—嘉永元年)名は解、通称瑣吉。後に篁民、曲亭と号す。質量共に近世第一流の小説家にして、椿説弓張月、南總里見八犬傳はその代表作。八犬傳は、中国では水滸傳、三国志演義、日本では太平記などに学び、關東の豪族里見家興起にまつはる、犬の字を姓に持つ八勇士の離合集散を中心とした大傳奇小説である。文化一一(一八二四)年初輯を出し天保一三(一八四二)年に終る迄、二十八年間にわたって九十八卷百六冊。この第九輯第四〇卷は末に「天保十一庚子年夏四月二十二日稿了」とあり、天保一二(一八四一)年刊行中の一冊の稿本。この頃かねての眼病益々悪く、やがて両眼失明、嫁路女をして代筆完成に至るのであるが、その直前の不自由を凌ぐ刻苦のさまをこの一字一行にとどめてゐる。袋綴六四丁、縦二五糎、横一八糎。

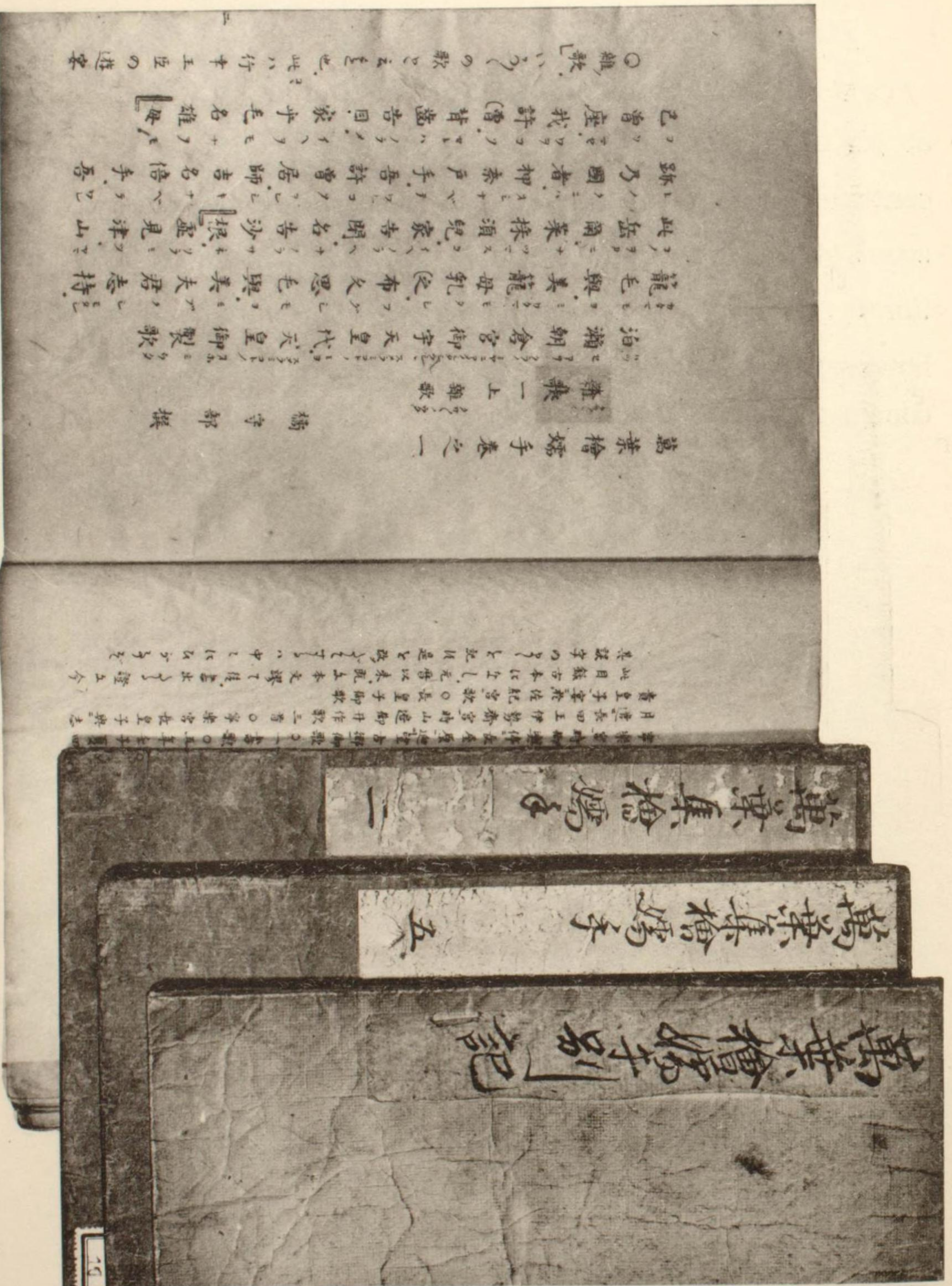


東都 曲亭主人編次  
 南總里見八犬傳  
 第九輯草稿  
 天保一三  
 四月二十二日稿了



五 萬葉集 檜 媯 手

橘守部(天明元—嘉永二年)伊勢の人、本姓飯田氏、初名庭麿後守部と改む。池庵、椎本等と号した。十七歳にして江戸に出で、学問に志し刻苦精励、殆ど独学で以て幕末の國学を代表する大家となった。その学独創の卓見に満ち、古典の解釈に於て宣長と見を異にする所あつた。古典の訓詁、歌の修辭学的研究たる歌格の論、國語学的研究各々の分野に亘つて夫々創見を出してすぐれた業績を残してゐる。本書は萬葉集の註釈書、万葉集卷三下迄で止んでゐるが、歿する前年の著であり、本書第六册十三葉は実に学問上の絶筆であらうと言はれる。「先注とものよきにもあしきにも拘らず、もはら自らおもふを眞なほに述べは、いはゞ悉く新説也」と自ら凡例に言つてゐるので、本書選述の態度がうかがはれる。六册。縦二七・五糎、横二〇糎。別に「萬葉檜媯手別記」一冊を副ふ。





Contents

1. Ōyakazu-Jōju-bun. Ihara Saikaku (1642—1693)  
A letter to his fellow poet.
2. Genchū-Shūi. Keichū. (1640—1701)  
Commentary on "Tale of Genji".
3. Dōji-Mon. Itō Jinsai (1627—1705)  
An introductory to his study on Confucianism.
4. Kikkadō-no-ki. Chikamatsu Monzaemon (1654—  
An eulogy on Kikkadō. 1724)  
(a pavilion named for Chrysanthemum)
5. Tokushi-Yoron. Arai Hakuseki (1657—1725)  
History of Japan on political stand point.
6. Itsuya-Zuihitsu. Emperor Reigen. (1654—1732)  
A miscellaneous writings.
7. Mabuchi-Kashū. Kamo Mabuchi. (1697—1769)  
An anthology of his poetical works.
8. Kojikiden. Vol. 3. Motoori Norinaga. (1730—1801)  
Commentary on Kojiki.
9. Tandai-Shōshin-Roku. Ueda Akinari. (1734—1809)  
An essay.
10. Tenchi-Ridan. Shiba Kōkan. (1738—1818)  
An essay, showing his progressive thought.
11. Jinshin-Shōki. Ōta Nampo (1749—1823)  
A notebook in the year 1812. (Shokusanjin)
12. Tōsen-Setsumon-Gakusho. Yamanashi Tōsen (1771—1826)  
Studies on Chinese characters and phonetics.
13. Kagetsu-Nikki. Matsudaira Sadanobu (1758—1829)  
Diary from the year 1812 to 1828.
14. Hakkenden. Vol. 9. part. 40. Takizawa Bakin (1767—1848)  
A romance.
15. Manyōshū-Hino-Tsumade. Tachibana Moribe. (1781—1849)  
Commentary on Manyōshū.

The Tenri Central Library which was founded some twenty-odd years ago now takes pride in the number of books of philosophy and literature in the Edo period (17 and 18 centuries). And we are going to offer for public perusal some of the representative autograph documents now in our library. As for two special genres of *renga* and *haikai*, however, we have omitted them this time from another consideration.



納本

昭和二十八年四月二十日印刷  
昭和二十八年四月二十六日発行

印刷者 株式会社 便利堂  
京都市中京区新町通竹屋町下ル

発行者 奈良県丹波市町柳之内  
天理圖書館